

地域の人々がともに支える教育現場を実現

JICAがニジェールで進めてきた「みんなの学校プロジェクト」。
地域の人たちが子どもたちの教育に関わるというこの取り組みを
自国でも実施したいと希望するアフリカの国々を対象にして研修が実施された。

JICA四国

研修コース **住民参加による教育開発**
受託機関 **鳴門教育大学**

●参加国：ガーナ、モザンビーク、マリ



発表に向けて、話し合いのポイントを書き出す。



SMC設立に向けた話し合いを想定して劇で体感。



開講式後、日本側の参加者ととも鳴門教育大学の中庭で撮影。



小学校の授業を見学する研修員。

「みんなの学校プロジェクト」は、地域・行政・学校が一体となって、子どもたちが学ぶ環境をよいものにしていく一連のJICA技術協力プロジェクトだ。ニジェールで始まった取り組みで、現在はアフリカに広がっている。2018年には、「住民参加のノウハウや日本での取り組みを学びたい」というアフリカ諸国の声を受けて日本における研修も始まった。2回目となる今回は、3か国から11名の研修員が来日し、徳島県の鳴門教育大学で約2週間の研修に参加した。研修員の多くは教育関係の行政官や教員だ。帰国後に、研修員たちが自国で住民が参加する学校運営委員会（SMC）を運営できるようにすることが研修の目的だ。それにより学習環境を改善し、子どもたちの学力が向上することを目指す。研修の前半では、日本の教育システムを紹介するとともに、学校と地域が協力して学校運営にあたっている自治体などを視察。後半は、SMC設立のための講義と体験型講座を行った。実例として、ニジェールで行われている設立から運営、評価という一連の手法が紹介された。

研修の最後には、国ごとに自国の状況をふまえたアクションプランを作成。SMCを設立するとしたら、誰に対して、どのような働きかけをし、どのようなスタイルで運営していくのか、それぞれの国の実情に合わせた具体的なプランを発表した。帰国した先で、地域の人たちと支える教育の実現が期待される。

■JICAの研修とは：途上国の多様な分野の中核を担う人々を招き、各国が必要とする知識や技術を学んでもらうもの。日本で行うものと日本以外の国で行うものがある。

SMC運営の具体的な方法を学ぶ

ニジェールの「みんなの学校プロジェクト」で活動したJICAの専門家を講師に迎え、①SMC設立のプロセス、②参加型基礎学力改善、③簡易な資金管理方法という三本柱を学んだ。透明性のあるお金の管理も重要なポイントになる。



JICA専門家による授業。

この研修で学べること

日本で実施されている住民参加の教育を視察

行政と地域が一体となって子どもたちの教育に取り組んでいる高知県や愛媛県の小学校、中学校を視察した。ある学校では、ひとりの教員では目が届かない家庭科の授業に地元の住民が支援に入るといった事例を見学。



上：中学校では生徒とも交流した。
下：地域住民が手伝う書道の授業に参加。

研修員's Voices

私の担当地域でSMC設立を予定しています。多くの学校に関わっているので、ここで学んだ公平で透明性のある委員選出を実践します。



郡教育事務所長
ガーナ
アジェマング・ドゥア・プリンス・チャールズさん

非公式なSMCはありましたがあまり機能しておらず、研修で本当のあり方を知ることができました。みんなに信頼される運営方法を確立し、子どもたちのためになる学校にしていきたいです。



高等学校英語教師
マリ
シソッコ・ディグィディ・ジブリルさん

民族対立の過去があるので、学校教育を通じて民族同士の理解や信頼を深めていきたい。そのためにも、しっかりと機能するSMCに変革していきたいです。



地方基礎教育学校マネジメント副事務長官
モザンビーク
カリシェ・ホセ・トミアス・サディアさん



鳴門教育大学 准教授
石坂広樹 (いしざかひろき)さん

鳴門教育大学大学院学校教育研究科 准教授。法学・国際開発学修士。Ph.D.(公共政策学)。研究分野は算数教育、教育政策、国際教育協力など。JICA専門家としてボリビアへの派遣などを経て、現在、大学でJICA研修を担当。

コースリーダーの目 みんなが主体者という意識が大切

鳴門教育大学は、以前から理数科教育に関わるJICAの研修を行っており、研修員の受け入れ態勢が整っています。また、四国で住民参加の教育に取り組んでいる自治体を視察できることから、本学での研修が始まりました。

名称は異なりますが、日本でも学校運営委員会（SMC）と同様の取り組みがあります。地域の人たちが学校の運営に協力することで、学校や教員の負担を減らし、社会とのつながりを強化することを目的としています。アフリカと社会的な背景などが違っても、現地の教育を左右する研修員たちが、日本で行われている活動を視察し、それに関わる人々と交流することはとても参考になります。実際の教育現場を見

てもらふことは、100万の言葉で説明するよりも伝わるものが多いはず。

特に後半の講義で意識したのが、帰国後すぐに活用できるよう、具体的な内容にすることです。SMCを設立するプロセスや委員の選出方法などを説明しながら、体験型講座を取り入れました。たとえば、学校や地域にSMCの利点をどう説明するのか、委員を選ぶための無記名投票選挙の導入をどう理解してもらうのかなど、想定される課題を設定し、寸劇で演じてもらいます。研修員たちはそれぞれのシーンを想像し、「こういうことを言い出す保護者がいそだよ」「それには、こんなふうにしなくてはいいよ」などと意見を出し合い、取り組んでいます。

た。アフリカの人たちは表現力が豊かです。なにをどう伝えるのか、実感を持って理解しながら、みんな芝居心たっぷりに演じました。

研修後に状況確認のためジブチを訪れたとき、校長や保護者、地域の方々から「SMCを導入してよかった。うまく意思疎通ができるようになりました」という言葉を聞きました。SMCという新しい取り組みには反発もありますし、関係者が多いので意見の取りまとめの苦労もあると思いますが、「みんなが主体者だ」という意識を持つことが大事だ」と研修で伝えたことが生かされていることを実感し、うれしく思いました。学校という環境を地域のみならず、そのための研修は今後も続けていきます。